

第58号

執筆者 @短信

ψ
ψ
ψ
ψ
ψ
ψ
ψ

高名 祐美

毎日暑い。大量の汗をかき、一日の終わりにほぐったりしてしまう。そんな日々の中、元日の地震で珠洲市の自宅が全壊の被害を受けた友人と久しぶりに会った。友人宅では、通水はしたものの、自宅敷地内の水道配管が修復されておらず、いまだにお風呂もトイレも使えない状況だそう。暑い季節に、さぞかし不便だろうと心が痛む。友人は早々に珠洲市を離れ、親族が住む金沢市を生活拠点とした。現在は週3日ほど自宅へもどり、片付けなどしているとのこと。仕事も退職した彼女は、「今、オリンピックをやっているでしょう。4年後オリンピックのときにはどこで何をしたらと夫と話してるの」「これからどうしよう…」としみじみ語ってくれた。どうしているのだろうかずっと気になっていた。ようやく会うことができた時間はあつという間に過ぎた。人と会う。大切なことだ。会いたい人に会う。会って話を聞いていこう、そう思った友人との再会。

父が自分の身を呈して
教えてくれたことⅡ
P225~

水野スウ

真夏月がやっと最終日をむかえた日、ああ、どうにかこの夏を超えられた、と今年は本当にほっとしました。

年々、地球が暑くなり、金沢の隣町に位

置するわが家だって当然、その暑さは増して、8月はほぼ毎朝9時になると「熱中症警戒アラートうんぬん」の役場からのお知らせが聞こえてきた。いつのまにその音に慣れっこになって、私はどこか他人ごと聞いてたんでしょ。実際これまで、大きな窓を開ければ、向かいの雑木林や庭の木々をくぐり抜けたそれなりのいい風がはいてきて、エアコンはないけど扇風機をまわせばなんとかなる、お盆過ぎれば夜風は涼しく、二階の寝室の窓は開けっ放しだとむしろ明け方寒いくらい、っていう夏をずっと過ごしてきたものだから。



ただ今年はそのようにはいかなかった。8月なかば、夜の暑さにやられてだったろうけど、夫婦ともども、たぶん軽い熱中症になりました。二階にこもった暑くて湿った空気の中できもちわるくなって、朝食後、かわりばんこに吐いてしまった。以来、寝る前から寝室で扇風機を回し、空気をかき回しながら眠りにつくようにしたら、それだけのことで眠りの質が全然違ってきた。それまでいかにむわっと暑い空気のなかで浅い眠りを続けてたことか、「浅眠(あさねむ)疲労積立貯金」による胃腸の疲れ、からだの疲れがきつとそんな症状になって出たことだったんでしょ。念のため、二人とも血液検査、夫は腸カメラ、私は胃カメラで診てもらいましたが、異常なし、でした。

金沢は都会だけどうちは田舎だから大丈夫、っていう正常性バイアスの危うさ、夏をなめんじゃねー！って叱られた気分、おおいに反省しました。まだまだ残暑はつづきそう。みなさまもどうぞお気をつけて日々お過ごしくださいね。

今号のマガジン原稿は、愛知県豊田で農家民宿を営む友人、乳がんサバイバーであるけーちゃんこと鈴木桂子さんの、生きることと死ぬことをめぐる死生観のお話の

おすそわけ、誌上アーカイブです。

自身のがんのこと、お父さんの看取りのこと、けーちゃん夫婦のこと、ゴール設定をする生き方がかわってくる、家族との関係性、周りの人との関係性もかわる、などなど、重たくなりがちなテーマも含んでるけど、けーちゃんの話をお聞きしながらみんなでいっぱい笑った、気づきがたくさんのおはなし会でした。多くの人に、けーちゃんこんな話を生で聞いてもらえるといいな、と思いながら今号を書きました。末尾に、けーちゃんの経営する米ぬか発酵温浴に私がはじめてはいった時の体験記のおまけ付きです。

きもちは言葉をさがしている
P88~

馬渡 徳子

8月15日。震災から早や7ヶ月半経過した。石川県では、お盆は7月と8月とで地域によって異なる。7月の金沢地区でも、「今年は金沢らしい賑やかな吊るし飾りを控えた方が多かったよ」と知り合いのご住職から伺った。

7月にご実家の公費解体と同時に「墓じまい」をされ、石川中央地区にある系列のお寺の納骨堂に納めた友人から、夏休み休暇の最終日、帰宅後に電話をいただいた。お墓のあった場所の周辺は、6月3日の地震により更に崩壊したため、やむを得ない選択だったが、先祖代々のお骨を順に抱きしめながら、「2度目の大地震は傍にいないでごめんなさい。故郷を離れることとなり、ごめんなさい。一緒に移住してくださいね。」と声をかけながら、ご親戚でお経を唱えたとのことだった。

友人から、この日までの親戚間での葛藤の経緯と決断を伺ってきたことから、なんと言葉をかけたらいいか、とても見つからなかった。うんうんと頷きながら、電話口で私は涙が止まらなかった。

報道によると、友人のご実家のある地域は、「街ごと集団移転」選択のご意向を自治体に伝えたようだ。だが、そのご意向が現実となるのは、年内はまだ厳しいとの事だった。

就寝前に、団士郎さんの『語り方』『木陰の物語』をとどけるプロジェクト2020年版』を拝読した。

はて、友人は将来どのように語るのだら

うか。私は、友人として傍らに居たいと思
った。

馬渡の眼 P155

乾 京子

この夏の猛暑の所為？公園の草抜き
作業日。ちょっと坂になっている花壇の上
から下へ、と…どうしたはずみかスッテ
ン！！鼻を擦り剥いて、右腕の肉離れ。
治るのに2週間かかって、治ったと思つた
ら、夏祭りでロープに足をとられて、また、
スッテン！！今回は、幸い怪我もなく無
事でしたが、こんなことも。「NOTO, NOT
ALONE」のトートバックを愛用しています。
図書館に行くときも買い物にも、リュック型
のカバンを背負って、「NOTO, NOT
ALONE」を左肩に引っ掛けて出かけます。
お玄関までで、忘れ物に気が付いてキ
ッチンへ。「あれ、どこに置いたかなあ？ト
ートバック見なかった？」あちこち探して、
新聞を読んでいた夫に聞くと、「肩に下げ
ているのと違うんか？」…暑さの所為で
はなく、後期高齢者それなりの老化現象
だったのでしょか？はて？

じゃりんこ文庫 P273~

山岸 若菜

ここのところ人間関係で悩んでいました。
人の気持ちはよくわからないなあと思う
ことが多く、とても悲しい気持ちになることが
ありました。それであーでもない、こうでも
ないと、相手の気持ちを想像したりしても
みたのですが、結局のところ「わからない」
に落ち着きました。

そしてあまりそこにとらわれて自分がし
んどくなっている今の状況は良くないなあ
と思った時、思い出したのがあの人の言
葉です。

鬼滅の刃煉獄さんの「考えても仕方の
ない事は考えるな」、しびれるわ～

そうやったそやった、相手の気持ちなん
てなんぼ考えてもわからなくて当たり前。
なので考えるのはやめました。

って、止められるか！

考えるのはやめようと思っても考えてし
まうのは仕方がない。だから時間が経つ
のを待とうと思います。

ある訪問看護師のあたまの中 P265~

宮井 研治

しかし、暑い。世間では、猛暑を通り越
して酷暑と言うらしい。時候の挨拶も、暑
い、暑いを繰り返すので、さらに暑苦しくな
っていけない。たぶん、この執筆者@短信
にも、酷暑を話題にされる執筆者も何人
かおられるだろう。対人援助学マガジンも
暑くなる。いや、熱くなるなら、かまわない
か。このフリは昭和だなと書いてて恥ずか
しくなった。昭和をことさら懐かしがるつも
り、自慢するつもりもないが、昭和生まれ
ど真ん中である。九州の田舎そだちである。
昨今のような酷暑ではなく、あのキリッ
として、カラッとするような礼儀をわきま
えた暑さはどこに行ったのだろう。暑さの後
には、きちんと夕立がきて、適量の雨をも
たらし、それが「涼」に続くような一連のお
約束はどこに行っちゃったのだろう。「ゲリ
ラ豪雨」や「扇状降水帯」なんて無粋で下
衆なネーミングからは、「涼」はひっくり返
っても湧いてこない。

これを読んで、あの失われし、屹立とし
た夏の入道雲を思い出していただきたく、
昔、少年、少女だった一定年齢以上の方
にご紹介したいのが、はたこうしろう作『な
つのいちにち』という絵本である。たまたま
TSUTAYA でみかけて、孫のためにジャケ
買いした一冊。以前は、孫のヘビロテだっ
たのには、秋野和子 再話/秋野玄左牟
画『とうもろこしおばあさん』にその座を奪
われているのは、じいじとしては、ちょっと
かなしい。でも『とうもろこしおばあさん』を
選ぶあたりは、さすがわが孫なるかな！



人生は対応のヴァリエーション P249~

中谷 陽輔

夏休みとされる時期が終わりながらも、
残暑が厳しすぎる今日この頃。子育てをし
ていると、「子どもたちの夏休み」イコール
「親が休めない夏」です。とにかかにも、
酷暑で夏バテしないよう、心身の調子を整
えることが目下の課題。

…でしたが、我が家はお盆前に見事
に夫婦ともにコロナ陽性となっていました。
幸い、子どもたちには感染しなかったの
ですが、元気の有り余る小1と3歳の子ども
との STAY HOME はなかなかでした。
STAY HOME の間は、テレビと家庭用ビニ
ールプール、あとは普段よりちょっと豪華
な食事(親が手抜きをして外注している
という噂も…)あたりで、何とか、本当に何と
か、乗り切りました(自分に拍手 笑)。コロ
ナが5類になる前は、もっと社会情勢的に
STAY HOME への圧が強かったでしょう
から、当時大変な思いをされた親御さんす
べてに、ホントお疲れさまでした！！と言
いたい気分になっています。

夏の思い出は、ひたすらプール、そして
コロナでしたが、秋はどのような思い出に
浸れるでしょうか。もう少しだけ、心身の負
担が少ないものを願わせてほしいです。

コソダテバシ P235~

櫻井 育子

これまで「調子に乗れる書道塾」という
場を開きながら、たくさんの方々に、手本
がない、楽しい、これでいい、と「調子に乗
って」いただきました。「調子に乗る」とい
うのはとても素敵なことだし、大事なことで、
無理のない状態で自分が表現できる、非
常に良い言葉だな！と確信しています。

今回、東京と宮城で個展を開催するこ
とになり、文字通り「調子に乗って」いるな
あ、わたし。と感じています。以前であれ

ば、「いや、たまたまですよ」とか「皆さんののおかげですから、すみません、なんか」とちょっと遠慮したり、申し訳なくなったり、のような「過小評価」をしていたような気がします。

ところが、ここ最近は本当に心の底から「ほんとに嬉しくて仕方ありません」と、胸を張って調子に乗っていられるようになりました。わたしが、わたしを対等に扱っていなかったのだ、と思います。人生一度きりなので、やはり調子乗っていた方がいいな、と思っているところです。



2024
9.10~9.16 AtIya 参宮橋
11:30~16:00
〒151-0053 東京都渋谷区代々木4丁目50-13 1F
9.29~10.6 本多工房
11:00~17:00 (10.5は20:00)
〒985-0003 宮城県塩竈市北浜1丁目40

「なまあそび」とは
だれもが楽しめる遊びです。遊びを通して、自分自身や他者とのつながりを感じ、心を開き、笑顔が溢れる瞬間を体験してください。

東京 AtIya 参宮橋
なまあそび&対談
9/16(日)
ゲスト 本多工房
宮城 本多工房
なまあそび&
対話型トークセッション
10/5(土)
11:00~16:00

朱紅(shukou / 櫻井育子)
宮城県在住、書家、美術家、発達コーディネーター。一人の世界が好きな幼稚園中級生に研究のための心理学を学ぶ、発達の研究に夢中になり特別支援学校教諭へ。現在は生涯発達支援TANEを立ち上げ、分野横断の学びの場を研究、書道・発達理論・アート思考で、自分を生きる表現活動へ応じ「なまあそび」を全国に広げる仲間を揃やす旅を続けています。

生涯発達支援塾 TANE

代表 櫻井育子

080-1853-1731

shukou0122@gmail.com

<https://ikuko-sakurai.com>

わたしはここにいる

P233~

鳴海 明敏

県庁職員を定年退職した翌月に新規開設された、情緒障害児短期治療施設(現在は、児童心理治療施設)の園長を引き受けてから、15年目に入っています。

園長室には「こかげ」という名前がつけられています。ということで、サブタイトルは「こかげのにちじょう」とします。紹介す

る子どもたちについては、それなりのカモフラージュを施しています。

*

ねぶたが終わりお盆も過ぎて、来週からは子どもたちは二学期が始まります。夏休み中に家族のもとに帰省出来た子もいれば、出来なかった子もいるのは例年通りですが、こどもたちは、それぞれの現実を静かに受け止めているように思います。

夏休み中に、小学校卒業後の進路(施設の移し替え)を検討するために、措置児相の一時保護所に行っていた小6男児も帰園しました。8月26日月曜日からは2学期の始まりです。

世界情勢や日本の政治はいろいろありますが、学園で生活しているこどもたちが社会人になる頃には、「日本」はどんな状況になっているのでしょうか？

昭和生まれの私は、21世紀になれば、科学技術の進歩とともに生活が便利になり、世界の平和も達成されていると信じていました…

児童心理治療施設の園長室から

~こかげのにちじょう~

P251~

高木 久美子

やったー。投稿の連載が10回に！記念すべきこの節目に、などとうっとりしている場合ではなく、ここのところ投稿が締切日を越えてしまい、団編集長、編集委員の皆様、ご迷惑をおかけしております。本当に申し訳ありません。え、あ、そうなんです、ここのところって、まともに締切前に出したことがあるのか。す、すみません！

でも、とにかく必ず、絶対投稿しますので、11回、12回と塵を積もらせませんので、今後ともどうぞよろしくお願い致します。当事者の方々の「わたしたちのおもいをかいてくれてありがとう」というお言葉。ご家族やご支援者からも「対人援助マガジンをお勧めしています。遷延性意識障害のことを知ってもらえるといいですね」とコメントに大いに励まされる日々です。やはり微力でも発信を続けていくことの大切さを楽しみ思っています。閉じ込め状態にある方々は何を思い、何を語っておられるのか。一緒に伝えていきます。外国語投稿にも挑戦したいなと思いつつ、思っては躊躇し、あきらめてはまた欲が出る…。その前に

まずは締切日厳守だ。しっかりしろ。

ヨミトリとヨミトリ君で一緒にしましょ！

P244~

野中 浩一

娘たちが2人も受験の年になった。大学受験と高校受験。

島根の片田舎に住んでいるため、塾に行くにも車で往復1時間、大学を見学に行くにも車で往復6時間。

娘たちを育ててくれた、田んぼや畑や平屋の民家が立ち並ぶ里山の風景から、人々が行き交うビルやコンクリートの繁華街へ移動。

娘10代、経験したことがない中で進路を判断することは難しいだろうと思う反面、私40代、だからこそ見えにくくなっていることもあるだろうとも思う。本人がよければどこでもいいと思う反面、どこでもいいということはないような気持ちになることもある。

あれこれ考えたうえで、結局は運転手程度の介入がいいのかもしれない。

「島根の中山間地から Work as Life」

P234~

畑中 美穂

なんと。庭に何か走り込んできたものがあると思ったらイノシシが。「うそやろ！」—いや、ほんと。

畑があるわけでもなく、木の根元辺りに積み上げた枯れた草を掘って何か探しているの虫の幼虫でも食べているのだろう。犬でもない、もちろん猫でもないケモノ感。それでいて臆病らしいから、うっかり鉢合わせして驚かせでもしたら突進してきて吹っ飛ばされそう。どうやら近所の人たちにも見つまっているそうで、どうなんだろうな、いずれ捕まるのだろうか。これも何かの縁、またやって来たら、welcome とは言わないが名前ぐらいはつけて、家のなかの安全なところから御姿を拝見することとしよう。

一語一絵

P228~

渡辺 修宏

夏の暑さにヒイコラしている。夏ってもっと、生命の息吹きを感じる季節だったです

よね？青々とした草木をみて、雲を見て、海をみて、空をみて、「ああ、生きている、たくさんの生命がみえる」と感じるシーズンだった気がする。しかし今は、ゲリラ豪雨とか地震とかで怖さのほうをより大きく感じる。否、怖さを知って、命の尊さを感じたい。

対人援助実践をレポートする この一冊 P231～

米津 達也

ただただ書き連ねて 15 回目となった。毎回、何を書こうかと考え、時に言葉を捻り出しながら紡いでいる。敢えてそういう機会を作らなければ言葉は生まれぬ。情報も言葉も手元の端末で一瞬にして消費される。何を書くのか、と同時に、何を書かないのか。自問自答しながら紡ぐこれからの生き方を模索している。

川下の風景 P220～

玉村 文

災害級の猛暑が続いている 2024 年夏。0 才児を連れて上の子達の保育園の送り迎えをするだけで汗びっしょり。赤ちゃんもぐったり。上の子たちも外遊びができないため、室内で身体を使って遊べる場所を求めて、毎週末どこに行こうかと頭を悩ませています。娘は「滑り台がしたい」と言うのですが、鉄板は火傷するくらい暑くて暑くて…この夏はパリオリンピックを観て、娘はプールに通い始めました。長男も体操に興味を持っていますが、習い事として行けるかどうかは準備が必要そう。そう、習い事で発散してもらえないと。「お母さん、ヒマー！」と言われて「公園でも行っておいでー」と返事ができる日はくるのでしょうか。

応援 母ちゃん！ P212～

川畑 隆

二度目のファイナルです。次号からどうするかは未定ですが、お世話になりました。この短信ではどこそこへ行って来たということばかり書いてきましたが、またそれで

冬に一泊して「次は春にきたい」と家族で言っていたところに、ゴールデンウィークにまた行ってきました。『神戸しあわせの村』です。昔から知っているところだったのですが、混んでるだろうと決めつけて敬遠…ところが意外に簡単に予約がとれました。

宇治の自宅からクルマで 1 時間ちょっと、「しあわせの村」という高速の出口があります。本館のグループルームという 4 ベットの部屋はホテルのようです。窓から見える芝生広場が「春にまたきたい」と思った理由。ちょうどフリーマーケットもやっていて、日焼けするぐらいに孫娘と遊びました。温泉大浴場は広くてきれいだし、屋内プールは 30 度以上の水温で過ごしやすい。朝食バイキングは豪華ではないけどいい感じです。夕食はどうしたかという、しあわせの村から JR 神戸まで路線バスに乗り、ハーバーランドの海鮮居酒屋へ。そしてモザイクから夜景を眺め、バスに乗って帰りました。

来年の春にもまた行こうかな。予約はまだちょっと早いかな…？

サイコロジー P207～

杉江 太郎

児童家庭福祉領域で働く杉江と言いますが、4 月に新しい支店がオープンしたのですが、オープンしてすぐの頃は、「どこにあるの？」とか、「連絡先は？」と聞かれることが多く、昔の〇〇の建物を改装したから、〇〇と検索したら出てくるよ～みたいな説明をしていました。いずれ新しい名称でも検索出来るようになるだろうと思っていたのですが、中々出来るようにならず、Google を見ていると、自分で登録できることに気づき、実際にやってみるともの数分で出来てしまい、すぐに検索出来るようになりました。世界的企業の Google の検索結果を、個人の指先で行えることに驚いたのと、登録してしばらく経った頃には、「1 万人の方が検索されました」というような連絡が Google 様から届き、さらに驚きました。私の一手が 1 万人の方の検索結果に影響を与えたのです。おそらく、関係者ばかりで、自分の検索回数も含まれていると思いますが、個人の力が集結する

と、Google のように巨大な情報を集約することに、社会システムの大きさと、その一員であることを感じました。

「余地」相談業務を楽しむ方法 P201～

浅田 英輔

コームインなので、今年からまた新しい部署に異動となっています。新しい関係機関の皆様とやりとりしていますが、「話しやすい人でよかった」と言われております。わかるうー！なのですが、どんな要素なんだろうと考えたりする。ある程度本音で話すことが大事なんじゃないかなと思ってます。ちゃんと本音を言ったあとで、「でも県職員としては、ここはちょっと難しいんです」というと大体わかってもらえる。当然、その後の改善策はセットになるけど。本当に思っていることを、少し人に話すっていうのはコミュニケーションとして大事だよなあと思ったりします。もうちょっと建前を学ばないと！



臨床のきれはし P113～

三浦 恵子

平素利用している電車が駅を目前にして急ブレーキで停車した。人身事故によるものだというアナウンスと車内にトレインチャンネルによる周知がしばらく続き、私を含めた乗客がしばらく列車内で待機することになった。多くの乗客の方が、自身の目的地までの振り替えルートを検索されるなどしているなか、先頭車両部分のみのドアが開き、振替輸送のアナウンスが流れると同時に、どっと乗客の方々の動きが始まった。

ただ、ホームに降りてから改札までのルートが一部停滞していた。駆けつけた消防隊員の方々が、事故に遭われた方を担

架に乗せてホーム上に引き上げる場面を、スマートフォンで撮影されている乗客の方が複数名おられたためだった。その方々の年齢層は様々で、写真だけではなく動画なども撮っておられるようだった。

思い出せば、令和に入ってからすぐの頃、都内ターミナル駅での人身事故発生時、御遺体を覆うシートの中にスマートフォンを差入れて撮影する行為があり、駅員の方が「お客様のモラルに問います」という「異例」のアナウンスがなされたということ思い出した。

私が遭遇した事故に関しては原因などは報道されていない。ただ、こうした人身事故がいわゆる「飛び込み」等の自死であった場合、「最期ぐらい他人に迷惑をかけるな」といった辛辣なコメントがインターネット上で散見される。そして今回のように、必死で救護にあたる方々もおられ、少なからず混乱している現場で、人の死に関わる場面を自身のスマートフォンに収めることに必死になっている方が複数おられることについて、非常に複雑な思いを抱いたのだった。

更生保護官署職員

(認定社会福祉士・認定精神保健福祉士)

現代社会を『関係性』という

観点から考える

P190~

迫 共

卓球の早田ひな選手の発言などでも話題になっている映画、「あの花が咲く丘で、君とまた出会えたら。」を見ました。現代の女子高生、百合がタイムスリップして特攻の兵士に出会って恋愛するという、SF 戦争ものみみたいな作品です。

百合は「日本は負けるんだよ」と憲兵にたて付き、逃げようとする特攻兵を責める仲間に「生き恥なんていることはない、生きたいという人を責める権利は誰にもない」といいます。

ラスト直前まで芝居じみた設定だったので「演劇としてはアリなのか」と見ていました。そのラストでは現代に戻ってきた百合が、特攻博物館で自分に宛てられた特攻兵の手紙を見つけて号泣する場面があります。

ここで日常と非日常が交錯するため、「え？ この手紙は実在するの？」と思わ

せられてしまいました。私たちの日常と世の中が地続きな世界観で作られた作品を「セカイ系」と呼びますが(新海誠監督作品など)、この映画もまた「セカイ系」的な心情を喚起させる構造をもつ、その意味で危険な映画ではないかと考えました。

「権利」を主張する若者に「特攻で散った人たちがいるから、今の平和な日本があるんだ。みんな平和を願って死んでいったんだ…」と思わせる(百合と観客の心情を一致させる)ための芝居じみた設定だったのではないかと。



暑すぎた今年の 8 月、死者の軍事利用にも、死者の平和利用にも反対だと改めて感じた映画でした。

迫メアド: sakotomoya@gmail.com

保育と社会福祉を漫画で学ぶ

P197~

黒田 長宏

これを書いている時点では日本ハムファイターズ清宮幸太郎選手がようやく打ち始めてきたところ。これが載る頃はわからない。推しの清宮の父親が同い年だとは。人生は人によって違うもんだなあ。私はひたすら高齢者結婚難問題を訴え続けているだけだ。(パリオリンピック最中に記す)

<https://konnankyuujojtai.jimdofree.com/>

あぁ結婚

P176~

松村 奈奈子

先日「システム・クラッシャー」というドイツの映画を見ました。8歳の主人公ベニーを演じる女の子の演技が見事でした。「システム・クラッシャー」というのは、養護施設や里親さんのところで、不適応を繰り返して、転々とする「子ども」の隠語だそうです。

いやー、日本ではそんな隠語は存在しないと思うのですが、攻撃的になったり、集団生活でトラブルを繰り返して、養護施

設や里親さんを転々として児相職員を悩ませる子ども達、もちろんいます。ドイツはどうやって対応してるのかな？と興味津々でしたが「んー、そうくるか」というオチでした。一緒にみていた旦那は「いかにもドイツらしい」と笑ってました。

確かに、ベニーのように母親や妹弟がいるのに、トラブルをきっかけに、その子ども独りだけ施設に入所となった時、「システム・クラッシャー」になってしまうケース多いよなあと思いました。

精神科医の思うこと

P144~

団 遊

高校時代の仲間のひとりが、50 歳にして上海転勤を命じられ、お別れ会を開催した。「子どもたちの学費の目処が立っていたら断ってた。わっはっは」と照れ隠していたが、50 歳での初海外転勤は、ちょっと羨ましい。

私の人生には、転勤がない。転属もない。大学を出てすぐからフリーランス。20代半ばで起業したので、誰かに雇われた経験がない。自分で自分を配置・転換するのだから当たり前なのだが、青天の霹靂的人事というものに、ちょっと憧れたりもする。

「団くん、来月からキミはフランス支社の社長として海を渡り、EU 全体を見てくれ」と言われたら、たぶん興奮する。

「団くん、来月からキミは南極の昭和基地にシェフとして渡り、調査員たちの食事をつつてくれ」と言われたら、早速大量のレシピ本を買いに行くとと思う。

お金を出せば、フランスに行くことも南極に行くこともできるが、決定的な違いは「どうなっても知～らんビ」「俺のせいじゃないもんね」「命じたのはそっちだもんね」と思えるかどうか。

責任感がないわけではなく、ゆるいリードを付けてもらった状態で「好きにやってこい！」と言われる感じは、ちょっと羨ましい。

団遊の脱線的経営言論

P 41~

村本 邦子

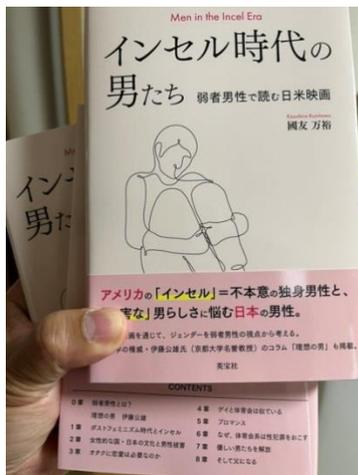
最近、災害予報がかしましい。南海トラ

フ警戒での自肅の次は、進路予測不能な過去最大級の台風である。ちょうど東北のプロジェクトと重なり、メンバーたちと事前打ち合わせで、情報をチェックしつつ、状況に合わせて工夫しながらできることをする、できないと判断したらあっさりあきらめるといふ基本原則と、状況を報告する連絡経路を確認した。だから、メンバーに混乱はなかったと思う。そして、今、予定通りプロジェクトを実施中である。まだ台風の行方はわからないところがあるが、世の中はちょっと騒ぎすぎなのではないか。人間は自然の一部である、災害とともに生きている。百パーセントの安全はない。過去に学び、自分の想定を拡げつつ、それぞれの判断でその都度決断していくしかないのである。まだ来ない未来の不安に振り回され過ぎず、今この時を大切に生きたいものだ。

周辺からの記憶

—東日本大震災家族応援プロジェクト—
P124～

國友 万裕



著『インセル時代の男たち』が出てから1ヶ月以上がたちました。

その間、ある大学で小さな講演もやらせてもらいました。講演はそれなりに成功で、「新しい視点を与えてもらった」と言ってくれる人が多かったです。

とはいうものの、こういう反応が返ってくると僕は複雑な気持ちになるのです。僕はもう子供の頃からこの問題に囚われているのに、世間の男性たちは、こう言う問題について考えたことすらないから、「新鮮」と感じるわけで、「俺はマイノリティなのだ」と言う思いを新たにするのでした。

これからどうやって本を売っていくのか。

まだ今のところ、取材の依頼はありません。結構値段も高いですし、売るとなったら大変でしょう。

別に金儲けをしたいと思っていないわけではないです。ただ、少しでも僕のこれまでのトラウマを理解してくれる人を増やしたいんです。それだけが切なる思いです。

スポーツおじいさんになりたい！
P100～

西川 友理

大阪キリスト教短期大学で保育者養成をしています。それから、いくつかの養成校・養成施設で、社会福祉士の養成にも携わらせていただいています。

今回は「先生」について書きました。

気が付けば私も、いろんな所で「先生」と呼ばれる仕事をしてきました。

一時期私は、本当に「西川先生」といわれるのが苦痛でした。「先生」という言葉が出たことで、周囲の人が「先生」という対応をしてくことに、居心地悪さを感じていました。そしてそれは、学生に対してもそうでした。大したこと出来てないのに、我ながら先生って何やねん……とっていました。何かたまたまうまくいって「さすが先生」と言われると、先生だから出来たわけじゃないよ、とモヤっとしましたし、「先生なんですよ、もうちょっとしっかりして」と言われるとぐっとのどが詰まりました。

その時期に、あるユースワーカーの人からぼろっといわれた言葉があります。「どこまで行っても、どんな距離感でも、養成校というところにいるかぎり、学生にとって西川さんは“先生”なんだよ。その立場をまず受け止めていこう。それから、どうするか、ですよ。」

重く重く重く受け止めました。そうか、それはそうだよな。学生にとってみれば、どこまで行っても「先生」だ。学生から見たら、「最終的に学生に評価を下す人」だ。それはそれとしてどうするか、か。なるほど。

最近では、いい意味でどう呼ばれてもどうでもよくなってきました。何と呼ばれようが、私は私のやりたいことと

すべきことを、やりたいようにするだけなんだと思うと、誰に何と呼ばれようがやっと気にならなくなってきたように感じています。……単に年を取って鈍くなっただけ

かもしれませんかね。

福祉系対人援助職養成の
現場から
P77～

竹中 尚文

今年の七・八月はどうしようもなく暑い日々が続く。七月末にあるホームレスの方から連絡が入り、仲間がバタバタ倒れて搬送されていくと。この酷暑の中を、冷房のない所で過ごすのはきびしいものだ。同日、ある新聞社の方から電話があった。大阪のホームレスの様子を聞かせて欲しいと。伝聞であるが状況を話した。この暑さへの何か対策の活動をしないのですか？と尋ねられた。私たちが活動をするのを記事にしたいようだった。報道機関が直接、ホームレスに取材に行き、現況を伝えることを提案してみた。大都会の中で、どこかで一時的にも涼に触れることができる場所があると思う。そうしたときに、ホームレスだからといって排除しないほしい。そうした社会認知を得るには報道機関の力は大きい。◆1983年のパキスタンのペシャワールの町は騒然としていた。1979年のクリスマスにソ連軍がアフガニスタンに侵攻して戦争が始まった。ペシャワールの峠の向こうは戦場だった。町は戦場から逃れた難民であふれ、ソ連軍に対抗する各ゲリラ組織がこの町に集中してその兵士たちも闊歩していた。町で外国人が宿泊するホテルは1軒だった。宿泊者はジャーナリストと国連の関係者ばかりで、世界のマスメディアにこの町のこのホテルから発信されていることに驚いた。この時、特に日本の報道機関の社員には誰一人いなかった。すべてフリーランスのジャーナリストだった。そのわけを尋ねると、もっぱら戦場で大きな報道機関の社員が死亡すると問題になると聞かされた。誰かがその責任を問われることになるという。正社員が戦争の取材をしたのはベトナム戦争までのことだそう。そうか、現場からは伝えないのかと思った。◆災害の様子を伝えるテレビ画面で、罹災者は誰もヘルメットをかぶっていないけれど、マイクを持つ人だけがヘルメットをかぶっている光景を思い出した。

路上生活者の個人史
P98～

坂口 伊都

生まれて初めて「人間ドック」に行ってきました。ここ2年程、採血した後に肩こりがひどくなり、吐いてしまうことが続いたので、ゆったりとできる場所で採血をしようと思ったのがきっかけです。後、健康診断を受けると、必ず再検査が出てくる年齢になったので。

鼻からの胃カメラも初体験。「鼻から麻酔を入れますね」と流れてきた麻酔の不味さに驚きました。そして、喉が機能しなくなることの不快感。看護師さんに背中をさすられ「上手にできていますよ」と宥められ、チューブを引き抜きたい衝動に打ち勝ち、検査は終わりました。私の魂は抜け落ち、何を言われても右から左へ流れていきました。

支払いを終え、噂のご褒美ランチへ。とても美味しそうなのですが、食べられない。お腹も痛くなってきた。悔しいので、メインだけ意地で食べて家路へ。吐き気が増してきて、家のソファで寝ると少しマシになりました。食べ物をつまむと、またムカムカ。2回寝たらさすがに回復しているだろうとシャーベットを食べたら、ついにトイレで嘔吐。採血が午前中で吐いたのが19時。胃がひっくり返るかと思うほど、悲惨でした。

私は声を大にして言いたい、健康診断で体調が悪くなるなんて本末転倒ではないか！



これから私はどうしたらいいのでしょうか。健康診断拒否する方法あるかなあ。受診するにも、どこへ行けばいいの？どなたか私に助言をください〜。

立場が変わると何が見える

P118~

河岸 由里子

【巷の小話】

日々いろいろな方と話をしていると、ちょっとした面白い話、困った話が聞かれる。

そんな話を二つほど。

- ① ある母子家庭のお母さんの話：公衆浴場や旅館等の共同浴場の男女分けで、厚生労働省は「概ね7歳以上の男女は混浴させない」と今までの12歳以上から年齢制限を引き下げた。「我が子は、今6歳だから一緒に入れるが、7歳になったとたんに一人で男性浴場の方に送り込むのはとても不安。父親がいれば、父親と一緒に入ればよいのだから問題ないが、母子家庭ではその点困る。誰か適当な人と結婚するっきゃないかあ・・・。」と話していた。母子で旅館に泊まったりすると、大きいお風呂に入りたがる子も多い。大きいお兄ちゃんが居れば、兄弟で行ってもらえばよいが、一人っ子、或いは女の子の兄弟しかいないとしたら、見ず知らずの男性の集団の中に、7歳になったからと一人で送り込む不安は想像に難くない。昨今は低年齢の子どもたちへの性的いたずらも懸念される。だからと言ってそのためだけに誰でもいいから結婚しようなどという無謀はもちろんしないでらう。これが父子家庭であっても同様である。娘一人女性浴場に送り込むのはやはり不安だろう。こうした問題が起こることを、厚生労働省は想定していたのだろうか？

- ② ある60代男性に聞いた話：昔、やくざの親分のところにしばらく世話になったことがあった。当時まだ10代前半。親からの虐待もあって家出し、非行に走っていたころの話である。一般的にやくざの親分になる人は、至極まともな方だったりする。柄が悪いのは下っ端のチンピラである。ある日、母親が自分を迎えに組に来た。虐待していた父親は、こういうところには顔を出す勇気がない。母親は泣いて返してくれと頼んだそう。親分に呼ばれた自分に、姉さんは「あんたはいいやくざになるよ。」と太鼓判を押してくれたが、親分は「お袋さんがわざわざ迎えに来てくれた。

おやじがどんな奴かは聞いているが、お袋を泣かしたらいけない。お前は家へ帰れ。青破門だ。」と言った。やくざの破門には、青破門と赤破門がある。赤破門は只の破門。どこの組に行こうが勝手ということ。青破門はどこの組もこの人を入れてはいけないというものだそう。その後、10代の間は落ち着かなかったが、20歳前にはし、まともな人間としてしっかり働き、結婚もするという人生を送ることになる。やくざの世界のことは、あまり知らないが、破門にも二種類あるのだと初めて知った。この親分さん、中々の人だなあ。

公認心理師・臨床心理士・北海道

かうんせりんぐるうむ かかし 主宰

ああ、相談業務

P84~

先人の知恵から

P165~

大谷 多加志

2018年から、同志社大学赤ちゃん学研究センターとの共同研究で赤ちゃんの発達に関する調査を、いくつかの研究プロジェクトにまたがって実施してきました。当時関わっていた新版K式発達検査2020の改訂作業が無事完了できたのも、赤ちゃん学研究センターに協力してもらえたことはとても大きく、私自身の研究活動においてたくさんの経験と機会を与えてくださった機関で、感謝の念しかありません。以降、現在に至るまで、コロナ禍もあり、赤ちゃん学研究センターのセンター長も2度の交代があり、センターの機能や位置づけが変わっていく中で、今年度で赤ちゃん学研究センターでの共同研究が終了することになりました。赤ちゃん学研究センターでの研究が終わるのは、寂しくもあり、また心細くもあるのですが、改めて感謝を覚えるとともに、独り立ちする気持ちでこれからの研究活動を考える必要が出てきました。

そんな折、完全に思い付きで「じゃあ自前でやってみたらどうか？」と思い立ち、自分の研究室の半分のスペースを使って、赤ちゃんの発達調査を継続する方向で検

討を始めました。動き始めてみると、いろいろな巡り合わせもあって、来月にでも調査を始められるくらいに段取りが整ってしまいました。こういう風に、思いがけずトントンと話が進むことってあるよなあ…と思いつつ、せっかく得られた機会なので、またここから頑張ってみようと思います。

発達検査と対人援助学 P115～

鶴谷 圭一

9月の最終土曜日に園で初めてのマルシェを開催します。

在園児の保護者の方が市のまちづくり活動支援事業で子育てサロンを立ち上げ園を拠点に土曜日に定期的にイベントを開催してくれています。

最初は、担当職員が管理のために出勤していましたが、最近では慣れてきたのでカギを貸して、必要な設備は自由に使ってもらっています。

信頼関係あればこそですが、職員の負担なしに施設の稼働率を上げていくことができ、園の広報につながったり、大々的なマルシェの開催にもつながりました。

もちろん主任が頑張ってくれたことも大きな原動力になりましたが、園という器をいかに有効活用していくかが、さらに異次元の少子化を迎えるこれから必要なことだな、と思ったのです。

マルシェの概要は原町幼稚園 HP から



https://www.haramachi-ki.ed.jp/admission_guide/tamakoro-land/

原町幼稚園 <http://www.haramachi-ki.jp>

メール office@haramachi-ki.jp

インスタ haramachi.k

ツイッター haramachikinder

幼稚園の現場から P72～

中村 正

この連載も含めたくさん書き散らかして

きたので、それらをいくつかの書物にまとめたいと思い、継続雇用教員としての当面の5年間、そしてもう5年間、都合10年計画で前期高齢期を過ごす計画の大きな柱として予定を組んでいる。2冊分は原稿にして出版社に渡してある。もう一冊をまとめている。さらに創業した一般社団法人 UNLEARN の運営もこの10年間を基礎づくり期としていく予定である。とはいえ、なんら新しいことはやっていなくて、この40年近くやっていることを整形しているだけである。強いて言えば、研究モードだったものを事業モードに切り替えていることになろうか。これも学校法人の経営の一角を担ってきたこともあり、マネジメントのかたちだと思えば一貫している面もある。一人親方・個人事業主であるが、法人の運営は手続きの連続なのでその面では新しいことを学習している。法務、財務、税務、労務・人事などの諸相をひとあたり勉強である。バックオフィスとして知り合いを頼んでコンサルをしてもらっている。事務所も確保してよぼよぼ動き出している。

臨床社会学の方法 P24～

団 士郎

8月29日朝、京都を出発して、五泊六日の東北遠征をして、9月3日夜に戻ってきた。道中一度も、傘を差すことも、風に止められることもなかった。台風は全てTVニュースの中だけのことだった。

出発前、台風10号は奄美大島の辺りでグズグズしており、新幹線の計画運休が騒がれていた。時間をかけて準備してきたことも、列車が止まってしまうとどうにもなくなる。幸い29日朝の新幹線は定刻運行だったので、予定通り福島駅で同行者と合流できた。30日に出発の院生6名は飛行機の搭乗予約をしていて、新幹線の計画運休には引っかけず無事到着した。しかし二人の方はJR移動に不安を孕んだ状況に、断念することになり、準備して貰った企画は中止になった。

風、雨の台風被害ではないこういう被害をJRはどう考えているのだろう。今後、慣例のように念のため計画運休など連発されてはたまったものではない。安全、安心ばかり口にする一般庶民ではなく、JR運行責任者としてギリギリまで足を確保す

るのは諦めないで貰いたい。

予想より被害が少なく良かったですねーで済んでしまう気象予報士と一緒にならないでほしい。



晩年 D・A・N 通信 P49～

中島 弘美

この夏、北陸新幹線に乗って石川県を訪れた。一月に地震があった北陸地方への応援ツアーだ。人が多くにぎわっているところもあれば、建物等の被害がまだ残されていたり、地域のテレビ番組のニュースは、支援に関するものが多かったりして、まだまだ、復興半ばであると感じた。これまで、東北応援ツアー、熊本応援ツアーと、地震の被害があった地域へ、ささやかではあるが、エールの思いを込めて、各地にお邪魔させていただいた。

今年も地震、大雨、台風など自然災害が続く。現在も台風10号の影響が気がかりだ。

来年2025年は阪神淡路大震災から30年になる。被災してからこの期間をふりかえってみて、実際どうだったのだろう、来年は改めて向き合う年になりそうだ。

カウンセリングのお作法 P46～

篠原 ユキオ

夏の剪定

「この前、頑張ってた刈りはったのにあつという間に生い茂りましたねえ」と隣家の奥さんから言われて振り返る先には大きな入道雲をバックに枝葉を無秩序に生い茂らせた家の庭木がある。

連日のように熱中症警戒アラートが発せられている間はエアコンの効いた自室から出ないようにしているのだが、道路にはみ出してくる枝葉が気になってくると、つい家の影が道路にかかる時間帯を待って高枝切りバサミを持ち出す。



ひと月前にかなりきれいにしたのだが、中途半端なところでストップした。作業中に体調の変化を感じ、慌てて水分補給と水シャワーを浴びて熱中症寸前で助かった事があったのだ。それに懲りて以後、庭いじりはしばらく放ったらかしにしていたのだがまた気になってきた。放置してハチに巣をつくられた事が何度かあってその警戒感もある。

モノは違うが夏場に限らず私の頭髪も驚くほど伸びるのが速い。若い頃は肩にかかるほどの長髪だったが今は少し伸びても気になる。頭髪はここ30年以上、市販の家庭用バリカンで自分でカットしている。面倒だがそれが生きているという証拠なのだと思うと楽しみでもある。

HITOKOMART
P216~

鵜野 祐介

病気からの快復途上か、熱中症か、はたまた単なる「老い」なのか、疲れがたまっている感覚が続いています。

「一病息災」と割り切ってスローライフを実践しよう、と自分に言い聞かせつつ、「そんなのまっぴらゴメン!」と吠えたくもなる昨今です。

うたとかたりの対人援助学
P172~

寺田 弘志

若いころは「長生きなんてしたくない」「老醜をさらしたくない」「人生太く、短く」と思っていました。ここ数年、どんどん白髪になり、頭のとっぺんも寂しくなり、鏡や写真に写る自分の姿がとてもイヤでした。ここ半年くらいは、AGA(男性型脱毛症)の治療薬を買おうかなあと真剣に考えていました。頭の形が悪くて、小中学校時代、友達に「絶壁くーん」と馬鹿にされ、つらい思いをしました。それからずっと、欠点をできるだけさらしたくないと思って生きてきま

した。クラブ活動を選ぶときも、丸刈りをしなければならない野球部には、絶対に入らんとこうと決めていました。髪の毛をカットしに行っても、後ろとてっぺんはできるだけふんわり残しといてくださいとお願いしてきました。

今日は孫にあごひげを「どうしてここ白いの?」と聞かれました。「年をとると、髪の毛やヒゲが白くなるんだよ」というと、孫がかわいい手であごを撫でてくれました。白髪鬢に交じる年になってやっと、老醜や欠点を隠さずに生きるのもありかなと思えるようになってきました。「もっとハゲてきたら、いっそ丸刈りでもするか」。そう聞き直って、AGA治療薬を使うのはやめることにしました。

最近またお世話になった先生が亡くなっていたことを知り、悲しく、心細くなりました。「こんな私でも、生きてるだけで家族の心の支えになるかな。老醜をさらしても、長生きしよう」。そんなふうに考えが変わってきました。続きは本文で。

接骨院に心理学を入れてみた
P179~

松岡 園子

母が神戸の家を離れ、大阪に引っ越してきました。引っ越しのバタバタで、連載1回分抜けてしまいました。ごめんなさい。最初、引っ越しの話が出た時に、環境が変わるから母は嫌がるかもしれないと思ったのですが、意外にも母は、色々な思い入れのあったであろう物を、どんどん捨てだしました。一緒に住むことで安心したのか、毎年夏になると「しんどい」とヘルプの電話がかかってくるのが、今年は全く体調を崩しません。長年住んだ家に、それほどこだわっていなかったのかもしれない。私がそう思っていただけなのかもしれない。「どこにいるか」より「誰といるか」なんだな、と改めて感じています。



統合失調症を患う母と
ともに生きる子ども
P204

山下 桂永子

先日、友人2人と旅行に出かけたのですが、空港で職員の方に、「本日、予約が満席でございまして、もし良かったら1万円分のマイレージポイントを差し上げますので次便に乗っていただくことは可能でしょうか?」と聞かれました。知らなかったのですが、旅客機というものは、キャンセルを見越して定員よりも少し多めに予約を取り、ほとんどはキャンセルが出て予約した人全員が乗れるものの、予約した人が全員チェックインした場合は、次の便に乗ってもらえるお客さんを探らしいのです。私はそんなことあるんだなあとびっくりしましたが、面白そうなので受けることにしました。友人には「先に行って空港で寿司でも食べるといって!もらったマイレージでおごるから!♪」などと意気揚々と伝えて先に飛行機に搭乗する友人を見送り、搭乗口でのんびり待っていたのですが、幸いにも?キャンセルが出て、結局は予定通りに飛行機に乗ることができました。

こういう受け身的に起こる予定変更に関してはあまりストレスを感じないタイプなのですが、これが自分から誰かに予定変更をお願いしたり、連絡したりするのはすごくストレスだなあ、面倒だなあと思います。今回は「電話連絡」に関してのお話です。読んで頂ければ幸いです。

心理コーディネーターになるために
P156~

脇野 千恵

今年は人に会うごとに「暑いね!」が挨拶となっている。お店の人、知らない人もその言葉からコミュニケーションができる。長く生きていくと、つい昔の夏を思い出す。半世紀前は、日陰に入ると夏風が涼しかったなあと。趣味で野菜作りをしているが、今年は猛暑で作物がやけど状態で、収穫が少なかった。いくら水やりしても、葉や茎からの水分が取れないからだろうか、ナスなどは実が硬く人にはあげられない。そして庭の花々も、暑さに負けほぼ枯れてしまった。ヒマワリはかろうじて咲いているが、細い茎で花を支えられなくて下を向いたままだ。近所の様子を見ると、雨戸を閉めている家を見かける。我が家も今年ばかりは、光が入らないようにシャ

ッターや雨戸を閉めて過している。冷房をかけていても温度は下がらないからだ。縁側に置いているスリッパが熱で縮み履けなくなった被害も。地球レベルでの気候変動に、居住環境や作物の育成、動物の飼育など、自分のこととして考え直していく時期なのかなとつくづく思う。

こころ日記「ぼちぼち」

P222～

岡崎 正明

クリーピーナッツの楽曲に「のびしろ」というのがあって、最初に聞いて(カラオケで友人が歌った)すぐ「かっこええ～」と気に入った。その歌詞の中に「傷が癒えていく速度は遅くなるばかり。幸せの体感速度は早くなるばかり」というのがあって、なるほど上手いこと言うなあと思った。確かに若い頃と比べて何気ない日常に感謝したり、些細なことでも幸せを感じるようになった。年のせいと言われるとミモフタもないが、個人的には「セルフモニタリング能力」が向上した気がしている。若い頃はなんかイライラしたりモヤモヤすることがあっても、自らの声に耳を傾けず、目先のことばかり考えていた。体調が悪くなってもぶっ倒れる直前まで気づかず、ボランティア先のお宅で発熱してもんのすごい迷惑をかけたりのものだ。おかげで今では体調不良も早めに兆しを感じ、行動をセーブできるようになった。大人になったなあ(当たり前?)。

自分の気持ちを認め、ちゃんと大事にしてあげる。なんでそう思うのか深ぼってみたい、己と対話する。そんなことが昔よりできるようになったこと、幸福感が増したことはつながっているように思う。

ちなみに以前オープンダイアログの体験ワークに参加した際にも、人の意見が受け止めやすくなるだけでなく、自分との対話がすごく深まる感じがした。こんな体験が当事者の方にも起こるのだとしたら、なかなか興味深いし、やる意義がある気がしている。

役場の対人援助論

P109～

來須 真紀

長かった夏休みが終わろうとしています。我が家の夏休みは、塾とソフトボールで終

わってしまいました。ソフトボールでは、大きな大会を経験することができました。私も見に行きました。残念ながら2回戦で負けてしまったのですが、その相手のチームの雰囲気がとてもよかったのが印象に残っています。相手チームの指導者は、試合中、絶対に叱りません。注意もしません。褒めて励ますのみでした。子どもも集めて指示を出すときは、サングラスを外し、膝立ちになり、子どもより視線を下にして、指示を出しています。子どもたちもお互いのプレーを褒めあって、ミスがあつたら励ましていました。本当の強さってなんだろうと思いました。中学校に進学してもソフトボールを続けたいと思っている長女。ソフトボールを心から楽しんでもらえたらいいなと思います。

教室の窓から

P263～

山口 洋典

大学に勤務していると「夏休みが長くていいですね」と言われることがあります。そんなときは「銀行の3時に降みたいなものです」と言葉を返すようにしています。銀行は窓口対応が終了してから現金と伝票の確認などが行われるように、大学もまた、授業が終了してから各種の事務処理が続くためです。とりわけ大学では成績評定のための採点を緻密に行う必要があり、私の周辺では「採点の祭典」と呼んでいる人もいます。

学部には所属しない教員である私は、キャンパスや学部や学年を横断した科目を複数担当していることもあって、夏休みには夏期集中授業として、遠隔地でのフィールドワークを組み込んだ授業で複数のまちに訪れます。この数年は8月の6日と7日を挟む1週間は岩手県大船渡市での「盛町灯ろう七夕まつり」のサポートに、9月5日を挟む1週間は福島県榎葉町での「ならば31人の“生”の物語」での取材と編集に伺っています。

今年度はそれらに加えて、2014年から1年かえて約60人の学生のリレーで建設した宮城県気仙沼市・唐桑町鮎立地区のツリーハウスの再整備(8月26日～29日)、令和6年能登半島地震の支援に3回(8月10日～13日、9月8日～9日、9月23日～24日)伺います。一方で現場

への思いが空回りしてしまっていないか、時折は立ち止まって考えねば、と内省を重ねながら、この短信を記しています。

PBLの風と土

P278～

千葉 晃央

対人援助学会、第16回京都大会の準備をしています。今回は自分も登壇する児童に対する支援実践をテーマにした理事企画Ⅰ「多様な学びの創造 一動機づけを生み出す仕掛けを探る」発表者：河村昌樹(京都府り溪少年自然の家)、山本昌平(大阪市総合教育センター)、千葉晃央(京都光華女子大学)、大谷多加志(京都光華女子大学)について、思いをここに。

子どもたちが自ら参加し、楽しむことはいくつか浮かびます。その経験からも何かを学び、前に進んでいるのは事実とおもいます。その多くはレジャーや遊び、スポーツなどで対人援助と距離がある領域も多いところですが。今回はそこを重ねて継続的に成果を上げている実践を取り上げて、参加者も楽しいし、提供者側も楽しいプログラムに着目し、我々が参考にして取り入れるところを学びます。

現在、京都では外国人観光客が忍者グッズを買って帰る姿は日常的に目にします。日本でも忍者の人気の高いのは言うまでもなく、忍者要素がある作品も数え切れません。そして、対人援助の実践として、子どもを対象にした「忍者体験キャンプ」も毎年企画され、現在も京都で行われています。仲間とともに自然や文化にふれ、五感も用いて、行動力・生活力・創造力・判断力を養う人気企画として30年以上継続しています。そこにある子どもたちを魅了する仕掛けは何なのか? どういったメカニズムがあるのか? を京都府り溪少年自然の家、所長、河村昌樹氏をお招きして考えます。



そして、1970年代以降家庭にも浸透し、

親子で一緒に楽しむことも当たり前になったビデオゲーム。その大会を中学校の学習で「e-スポーツ」として導入している実践を行ってきた大阪市総合教育センターの山本昌平氏からもお話を伺います。他にも山本氏は多様な学びに向けた取り組みとして、不登校傾向の子どもに対する職業体験機会の確保、複数担任制の実施など、たくさんのチャレンジをして成果を上げてきました。教職員も含めた持続可能な学びの場づくりもされ、こうした取り組みから私たちも学びたいと思います。

お二人の取り組みは、これまでもあったプログラムに変化を追加して、本来ある楽しみをさらに広げ、受け手も提供する側も動機が高まり継続している活動です。対人援助学として深めるべきテーマがあるのは確実です。

「やりがい、生きがいのある対人援助を次代につなぐ」をテーマに京都大会は2024年11月2日(土)～3日(日)に京都光華女子大学で行われます。他にも価値ある企画がたくさんあります。駅からすぐの会場です。対人援助学マガジンファンの皆さんとリアルでお目にかかることを楽しみに、京都でお待ちしています。ぜひ、ご参加ください。

家族支援と対人援助 **ちばっち**

chibachi@f2.dion.ne.jp

090-9277-5049

障害者福祉援助論

P18～

古川 秀明

今までかからなかったコロナにかかりました。想像以上に辛かったです。特に高熱と頭痛が激しく、苦しみました。高齢者は命が危ういと言うのに納得しました。それよりにより、コロナ後遺症で臭覚障害と味覚障害がしばらく続きました。学校現場ではまたコロナが流行しています。皆様もくれぐれもお気をつけくださいませ。

講演&ライヴな日々

P284～

見野 大介

小1息子の夏休みの宿題に付き合う日々。もちろん今は余裕で教えてあげられる内容だが、教えるのが必死のパッチになるのは何年後になるのかドキドキです。

ハチドリ器

P6

柳 たかを

自分はテレビを見るのがなくなった。我が家では新聞は某大手の日刊紙をとっているが、自分は一面のトップ記事のタイトルをチラ見する程度で、新聞を広げて内容を読もうと思わない。同じ新聞のデジタル版を購読契約している、読もうと思えば読めるが、最近はその目をおす頻度は低い。

その代わりに、スマホで情報をとります。さらに英語は得意ではないが、英語を日本語に機械翻訳して英語記事と日本語記事を同時にアップロードしてくださる日本人の方が増えてきて、そういった方が注目している海外の情報をチェックしています。ウクライナ紛争、11月に予定されている米大統領選挙など。



すると、日本のニュース、テレビだけを見ては知り得ない話題やその関連情報が次々出る。近ごろでは日本語に翻訳された記事だけでなく、自分でオリジナルの英語記事にノロノロと目を通したり、翻訳アプリの助けを借りて自分で日本語にしてみたり、そうするうちに以前に比べて、日本語訳を見ずにその英文記事にいたいどんな内容が書かれているかぼんやりわかるようになってきた。忘れてい

たり知らない単語がたくさんあって自在に読みこなすまでにはいきませんが、このまま続けていきたいと思っています。

テレビのニュースショーのような丁寧な解説無しなので、興味深い情報と理解困難な情報が混ざりますが、テレビ&新聞だけでは知り得ない情報の奥の姿が見えてくるようで興味深い、続けていきたい。

それにしても国民に知る権利がある、注射薬お薬の内容を政府(厚労省)がことごとく黒塗りで出しているのを問題視せずに報道する主要メディアって、、、ふうー

やぶにらみ日記

P147～

小池 英梨子

ねこから目線。東京店が8月8日オープンした。ねこから目線。姫路店も9月9日からオープン予定です。20代前半の若手スタッフが活躍してくれてとても嬉しいです。お知らせしたい事も色々あるけれど、今回は報告系は一切やめて、つれづれな内容にしてみました。

そうだ、猫に聞いてみよう

P159～

原田 希

農繁期と牧場の母さんの急な入院が重なったので残念ながら休載します。ダメ押しで、従業員アパートが汚部屋になっていると発覚！快適な住環境は仕事の質にも反映すると考えて建てたアパート。究明はこれからですが、プライベートなことは干渉しない、大人なんだから本人に任せる、では済まない何かが起こっている気がします。母さんの方はお医者さんに任せて大丈夫そう。とにかく家業を支えることに専念します。

原田牧場Note 休載